

家族のかかわりの一考察(2)

— 人とのコミュニケーションを通して思春期を考える
お茶の水女大生活科学 中村洋子

目的：思春期の子供の自己形成の過程を取り上げ、家族を含む様々な人とのコミュニケーションを積み重ねることによって形成される自己について考える。また思春期の子供をもつ家族のかかわり方を探究することによって、ともに変わる状況について考察する。

方法：参加観察法・心理劇法・質問紙法を組み合わせ活用する。今回は主として仮設性の心理劇を活用する。結果を分析・考察するにあたっては、関係学(創始者 松村康平)の立場から かかわり分析を行う。参加者と共に かかわり方の仮説を考え、思春期の子供に対する日常生活でのかかわり方を幅広く 実験的に 行為化できるように配慮する。具体的には①多種多様な親子のかかわり方を考える心理劇②異なった3タイプの限定したかかわり方による友人と相談する場面の心理劇。劇後の演者・観客・監督の参加体験・感想を基に討論を丁寧に行い、思春期の子供における共通性・類似性・個別性を考える。結果：1.思春期は様々な人々とコミュニケーションにより、多面的な自己(側面)を発掘する時期である。2.幼児期から育てて来た自己と新しい自己(の側面)を考え合わせ、再構築がなされる。それは連続的に行われ、自己形成が活発になされる時期である。3.思春期の子供にかかわる第三者との相互関係が大きな影響をおよぼす。かかわり方を探究することによって自己形成がなされる。